

## 「満洲」をめぐる児童文学と綴方活動 —「満洲国」の次世代はいかに生み出されたのか—

キーワード：児童文学、綴方、「満洲」文化の特徴、アイデンティティ、引揚げ

本論文は「満洲」をめぐる児童文学と綴方活動を研究対象とし、既存研究では十分検討されなかった「満洲」文化の特徴、つまり「満洲」文化の産出の多元性——いかに多元的な権力と結びついて産出されたのか、産出された文化の辺境性——日本帝国主義と異なるどのような新たな言説が生まれたのか、そして文化影響力の連続性——戦前で生まれた文化が戦後に継承されたかどうかを明らかにした。

本論は2部に分けている。

第1部「『満洲』児童文学と様々な『満洲』像」においては、多方面の組織・人員が児童文学の創作に関与した有様が明らかになった。

まず、第1章「『満洲』における児童文学展開の歴史」では、「満洲」児童文学が展開する流れを整理した。当初の「満洲」では「満洲」児童文学は誕生しておらず、主に日本（内地）から出版物を輸入し、あるいは日本（内地）から児童文学者を招待し口演童話会を開くことで、在満日本人児童に児童文学を提供していた。やがて在満日本人児童の増加とメディアの発展に伴い、児童文学が様々なメディアに登場しはじめるようになる。児童文学の創作と発表の場は、主に文学者が主宰する同人誌、教育機関や企業などの組織が作った機関誌、大衆メディアと、三つのジャンルに分けることができる。それらのメディアを通して、「満洲」の子供のために「満洲」を描く「満洲」児童文学が登場したことが明らかになった。

第2章「『満洲』童話作家・石森延男の登場——満鉄社員会機関誌『協和』における創作活動を手がかりにして」では、満鉄社員会機関誌『協和』を取り上げ、『協和』における児童文化の様態を明らかにした上で、『協和』における童話作家・石森延男の創作活動を考察した。『協和』における児童向けの内容は、家庭生活と文学芸術の二つのカテゴリーに登場し、バリエーションが豊富であった。子供に娯楽を提供することを意識しつつ、鉄道知識や満鉄の功績を紹介する内容も見られ、満鉄を宣伝する意図も窺われる。石森延男は『協和』において発表した作品群を分析することを通して、石森の創作意識の変化を見出した。渡満してまもない時期、彼は日本（内地）の反軍童話の源流を汲み、「満洲」とはあまり関わりのない反軍童話を創作した。「満洲」現地意識が萌芽すると、「満洲生徒のために」「満洲」を描く「満洲」童話を試作しはじめる。また、石森が描いた「満洲」は戦争と無関係で、子供の感性を育む現実を離れた理想郷であった。『協和』は創作初期の石森に活躍の舞台を提供し、石森が「満洲」代表的な童話作家に成長する土台となっていたのである。

第3章「動員する文学・動員される文学——満洲移住協会機関誌『拓け満蒙』の小学生欄を中心に」では、「満洲」開拓移民動員と児童文学との関係について着目した。『拓け満

蒙』の概況を把握した上で、満蒙開拓青少年義勇軍の募集とともに誌面に現れた小学生欄の登場と発展を追い、成人開拓文学と異なる特徴と機能を明らかにした。まず、小学生欄では理想な人物像が作り上げられた。それはただ農を楽しむ農民像だけではなく、子供らしさも表現した。また、「満洲」で開拓する理想な生活像も創出された。その理想な生活には近代的な農業生産だけではなく、少年義勇軍が出身村を離れたとしても孤立せず、現地で参加可能な農村コミュニティがあることが示された。少年義勇軍関連の児童文学作品においても、小学生欄と同様な戦略で子供を動員していた。小学生欄と少年義勇軍関連の童話作品の分析を通して、児童文学がいかに国策に動員され、また子供を動員する機能を果たしたことがわかった。

第4章「『満洲』育ちの童話作家・山田健二——『満洲』次世代の主体性を描くということ」では、日本生まれ、「満洲」育ちの童話作家・山田健二の作家人生を振り返り、戦前の作品を分析した。山田は日本生まれ「満洲」育ちで、成人後は満鉄の技術系社員として働いていたが、新聞や雑誌に多くの童話を掲載し、戦前において五つの作品集を出版した。彼の童話は日本（内地）の口演童話の特徴を受け継ぐ一方、独自の「満洲色」があると評価された。分析を通して、彼の「満洲色」とは、満鉄による「満洲」建設と五族協和の未来像という二つの要素だと判明した。山田は満鉄にまつわる日常を描き、満鉄による鉄道建設が「満洲」及び日本に貢献してきたことを強調すると同時に、「満洲」未来の建設主導権が満鉄にあることを示唆する。また、彼は童話作品を通して、「満洲」の現実を見る視点と、解釈の枠組を子供に押し付け、更に現実を改善した理想の未来像を創る使命を「満洲」の子供に託そうとした。山田は自身の童話作品を用いて、「満洲」の運命を背負うべき在満日本人次世代の主体性を描き出そうとしていたことが明らかになった。

第5章「戦後における『満洲』経験の再構築——山田健二『満蒙開拓青少年義勇軍』作品群の改稿を手がかりにして」では、第4章で扱った作家・山田健二が戦後、戦前の作品を改稿し出版した点に着目し、その分析を行った。戦前におけるテキストが少年義勇軍募集の推進に利用されたのに対して、戦後になるとこの作品は歴史の「真実」を伝えるものとして位置づけられるようになる。80年代再版の際には、日常生活を含めた「満洲」経験の全体が、祖国日本に帰るという枠組みに完全に回収されてしまうようになる。日本に忠誠心を示す表現が残される一方で、暴力性が窺われる武装の表現が削除される。その改稿によって、少年義勇軍と戦争との関連性が物語から姿が消えたと同時に、祖国に対する忠誠心を強調することで、祖国へと引揚げる正当性が示されるようになったのである。この改稿は、「満洲」からの引揚者が戦後日本の内向的ナショナリズムに応じて、日本（内地）人の視点から自らの「満洲」経験を語らざるを得ない状況を反映している。

第2部「『満洲』次世代の誕生——日満綴方使節をめぐって」では、児童文学の受容者とされる児童が書いた綴方に注目し、日満綴方使節を取り上げて考察した。

まず、第6章「日満綴方使節の活動——児童がいかに『満洲国』支配へ統合されたのか」では、日満綴方使節活動の過程を考察し、国策会社・メディア・学校・教育者・文学者な

どの諸勢力がそれぞれ異なる役割を分担し、連動しつつ機能したことで成り立ったことが明らかになった。活動の過程で、児童は用意された日満認識の手本を読み、それに模倣して自らの言葉として綴方を書く。旅行中、決められたものを見学し、決められた人と交流した後、その「用意された」日本や「満洲国」について綴る。メディアでの報道を通して、使節は少国民の模範となり、書かれた綴方とともに、人物像や生き方そのものも、他の児童の模倣すべき対象として示された。使節が綴った内容は他の学童に対して真実であるように呈示され、広がっていく。つまり、読む、書く、見る、聞く、話すといった一連の行為を児童に経験させることで、支配論理を児童に押し付けようとしたことが明らかであった。

第6章で行った活動に関する考察を踏まえ、第7章「交錯するまなざし、齟齬する満洲夢——『綴方日本』と『綴方満洲』の比較から見る日満関係のポリティクス」では、日満綴方使節によって書かれた二冊の綴方集『綴方日本』と『綴方満洲』を取り上げて考察を行った。その中から、日本〈内地〉の子供と「満洲国」の子供がそれぞれ持つ日本と「満洲国」、および日満関係に関する認識の齟齬を読み取ることができた。日本〈内地〉から「満洲」へ旅した使節は、「満洲国」を完全に日本〈内地〉に支配された、日本〈内地〉人が移住する新天地と見なした。それに対して「満洲国」から日本〈内地〉を旅した使節は、「満洲国」が日本と対等な立場に立つことを前提に、協力関係を築くことを想定していた。「満洲国」の先進性を誇らしいものとして日本〈内地〉と比較を行いつつ誇示すると同時に、日本の先進的な経験を「満洲国」の建設に取り入れることで「満洲国」を発展させよう構想する。自らの手によって「満洲国」を建設し、未来を築く意欲が強く表れているのである。このことから、「満洲国」には、日本〈内地〉との差異がみられるような子供たち、すなわち「満洲」の次世代が存在したことが示唆される。

第8章では、「満洲」の綴方に携わり、日満綴方使節の文章に魅了された作家・川端康成と綴方との関係について考察を行った。川端は「満洲」で綴方の選評に携わり、第7章で言及した『綴方日本』を絶賛し、自らの作品に大量に引用した。それまで綴方に興味を示さなかった川端は、戦時中になると「満洲」の綴方に注目し、綴方選評や作品集の編集などに積極的に携わった。彼が綴方に興味を示した理由は、文学的理想である人間救済を綴方に託したためだと考えられる。川端は文学的理想の実践場所として「満洲」を選んだ。実践の対象として現地日本人のみならず、日本語教育が遅れている現地人や障害者も選び、日本語が不上手とされる彼ら・彼女らに対して、綴方の素晴らしさを教え、生きる喜びを感じさせようとしたのである。そうして、川端の綴方活動が日本帝国主義支配と協力関係を結び、国策に巻き込まれてしまったことがわかった。

以上の考察を通して、「満洲」文化の産出の多元性、産出された文化の辺境性、文化影響力の連続性を浮き彫りすることができた。まず、「満洲」の児童文学は、満鉄、教育現場、移民推進機関、マスメディアなどの多元的な勢力に結び付き、発展してきたことがわかった。また、日本帝国主義イデオロギーとは多少異なる、「満洲」で産出された新たな言説が

二つあった。一つは、「満洲国」の「理想国家」としてのイメージである。もう一つは、日本〈内地〉人と異なる「在満日本人」という新たなアイデンティティが登場したことである。

戦前において「満洲国」の付与された「理想国家」のイメージは、戦後になっても存続しているとみられる。一方で、「満洲」児童文学から影響を受け、「在満日本人」というアイデンティティを持っていた「満洲」の少年少女たちは、敗戦を迎え、「戦後日本」になった日本〈内地〉へ引揚げた。帝国の崩壊とともに、移動を余儀なくされた彼ら・彼女らは、〈戦後〉日本という国家、〈戦後〉日本人という枠組みへ再編に迫られた。そこでは、「在満日本人」のアイデンティティは排除されるべきノイズとなっていた。在満日本人だった人々は、〈戦後〉日本の国民として暮らしていかなければならなくなったのである。